

ニュースレター

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

キリスト教と文化研究所の活動に期待します

18世紀半ば、蒸気機関の発明に端を発する産業革命は人間の社会にとってエポックメイキングであり、その革新的な技術はまたたく間に世界中へと広がりました。以来、科学技術の発展は間断なくつづき、特に20世紀後半から今日までの情報通信分野における技術開発はめざましく、私たちの仕事や生活など、あらゆる場面に変化をもたらしています。



規矩 大義 学長

より便利な生活を求め、あるいは、新たな発見への知的好奇心から、科学技術の発展はこれからも続いていくことは疑いようのない事実です。科学技術の発展は、私たちの暮らしをより豊かにし、より快適にするだけでなく、社会課題の多くが解決に向かうことも期待されます。しかし、技術の発展だけですべてを解決できるバラ色の時代など、訪れるはずはありません。

なぜなら、いつの時代もこれらの技術を扱う者が、「人間」であることに変わりがないからです。どれだけ科学技術が進歩しようとも、人間の営みの根本は、大きく異なるものではないはずです。きっと、過去の人々も、現代の私たちと同じように悩みを抱え、同じように希望を抱き、日々の生活を過ごしていたことでしょう。

人間の本質は、時代が変わり、社会が変わり、生活が豊かになろうとも、そう簡単には変わらないものではないでしょうか。この本質を理解すること、あるいは理解しようと試みることは、それ自体が普遍的で尊い人間の営みだと思われるのです。

キリスト教と文化研究所では、幾つもの研究グループに分かれ、それぞれの課題を通じて「人間の本質」を理解しようと、継続的な試みを実践されてきました。仕事、生活のスタイルが大きく変化しようとする時に、その綻びがどこかに生じてしまうことも、私たちは過去の歴史を通じて知っています。この急激な変化が生じている時代にこそ、それぞれの活動が綻びを繕うものであってほしいと願っています。物質的な豊かさに加えて、人間の本質的な豊かさにも近づぐためにも、各グループの活動に大いに期待しています。

『いのちは誰のものか医師の視点から考える 「尊厳死、終末期医療と日本国憲法」』

尾之上さくら

いのちを考えるグループでは、本年度は「いのちは誰のものか」を共通テーマとして、さまざまな視点から検討しています。1回目の研究会では、『アフリカ・ザンビアの地で学んだ「いのち」』、第2回目は、『医師の立場から「いのちは誰のものか」』というタイトルで、ゲストスピーカーに講演して頂きました。第3回目、第4回目の研究会では憲法学者、心理学者、それぞれの立場から「いのちは誰のものか」について報告して頂く予定です。



田中 良明先生

今回は、2019年8月31日に関東学院大学・関内メディアセンターにて、埼玉県庁保健医療部保健医療政策課感染症対策幹の田中良明先生をお招きして講演いただきました内容を報告いたします。

人生の終末期において

人は生まれたその時から死に向かって歩いていきます。誰にでも公平に死は訪れることは分かっていますが、健康なうちは死について考えたくない、あるいは考えることを後回しにしたいと思う人が多いのではないのでしょうか。

講演では、「自分が人生を終える時にどのような死に方をしたいか」、「大切な家族にどのような最期を迎えさせてあげたいか」について考えておかなければならないというお話から始まりました。先生は、終末期に本人の思いをかなえることが、残された家族にできる唯一のことであるのだから、病名や余命の告知、終末期医療や生命維持措置の希望（人工呼吸器の装着や、胃ろうでの栄養補給、心臓マッサージなど）などについて本人と家族で話し合い統一した見解をもっておくことが大切であると言われました。

尊厳死と安楽死

続いて、先生は、終末期に語られることの多い「尊厳死」と「安楽死」について話されました。「尊厳死」とは、平穏死や自然死を望む場合にそれを尊重して終末期の延命治療を差し控え、代わりに十分な緩和ケアを受けながら自然な最期を迎えることを言います。一方、「安楽死」とは、余命とは関係なく激しい苦痛に悩まされている人に対し致死薬を投与して死に至らしめることを言います。ここで、先生は1つの事例を挙げられました。「脳損傷などによって、意識はあるが瞬きや目を縦に動かすことでしか意思疎通ができなくなった患者で回答が得られた91名のうち、安楽死を望んでいることを表明した人は6名のみであった。」瞬きなどでしか意思疎通ができないのであれば、「死なせてあげても構わない、むしろその方がその人のためだ」という価値判断が共有されている現代社会において、同じような状態であっても「生きたい」と思う人の権利は守られるべきものであること、また延命治療を悪いものと見なし、「安らかに死なせる」ことを選んだ場合、それは「あり得た生活」の可能性を閉ざしてしまうことになりかねないことを認識するべきであると話されました。そして、家族に迷惑がかかるからと延命を拒否する高齢者が多いなか、「尊厳ある死(良い死)」や「尊厳のない死(悪い死)」を決める前に「尊厳のある生」があることを知る必要があるということも話されました。

いのちは誰のものか

講演の最後に、先生は次のように話されました。「自分のいのちは自分のもの」という時、現在の健康な自分の立場で考えているに過ぎないことに注意しなければなりません。終末期に自分のいのちを自分で決めることができれば、「自分のいのちは自分のもの」と言えますが、延命治療が必要となった場合に尊厳のある死を選ぶのか、あるいは尊厳のある生を選ぶのかは、家族や医者かもしれません。つまり「いのちは自分のもの」という考えは、フィクションであることを自覚しなければなりません。もしも、「自分のいのちを自分のもの」にしたいならば、終末期の迎え方について自分の意思を明らかにし、書き残しておくことが大切です。

今回の講演会では、医師の視点からみた「いのち」の所在について明確なメッセージをいただきました。グループメンバーからは、尊厳死を含めた死の問題をめぐる原理原則はあるのだろうか、社会的強者には生の、社会的弱者（老人や障がい者など）には死のイメージを関連させるような価値観に課題があるのではないだろうか等の質問がなされ、活発な議論が交わされました。

田中 良明先生の略歴

千葉大学医学部卒業(医師免許取得)

千葉大学大学院医学研究科修了(博士(医学)取得)

厚生労働省健康局総務課地域保健室、東京都庁健康局地域保健部環境保健課勤務を経て、現在は、埼玉県庁保健医療部保健医療政策課感染症対策幹に勤務

新所員紹介

高井 啓介



今年度より所員になりました国際文化学部比較文化学科の高井 啓介です。金沢文庫キャンパスの宗教主事もつとめております。講義はキリスト教学、宗教文化論、現代のキリスト教社会などを担当しております。またゼミナールにはキリスト教や宗教に興味のある学生が集まってくれています。

私の専門は旧約聖書学ですが、博士論文ではシュメール・アッカド文学と旧約詩篇の比較を行い、広く視野を宗教史的にメソポタミアまで広げました。また、現在は、科学研究費の研究課題として、思想的関心から、旧約聖書のなかに現れる降霊術師がヘレニズムの聖書翻訳のなかで「腹話術師」と訳され、それがキリスト教近代において魔女視されるに至った過程、また現代のエンターテインメントとしての腹話術ともつながりを持つことなどを、文書資料および画像資料を通して明らかにしようとしています。

研究所では、坂田祐研究グループとキリスト教と日本の精神風土研究グループに所属しています。前者では、グループのリーダーとして活動することになりましたが、これまでの研究会の歴史とその成果を踏まえつつ、新たな挑戦をしていくことができたらと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

豊川 慎



2019年4月よりキリスト教と文化研究所の所員に任ぜられました豊川 慎と申します。

大学で神学を学んだ後、カナダのトロントとオランダのアムステルダムでの留学を経て、2005年に東京基督教大学の助手に任用されて以来、明治学院大学や関東学院大学などで非常勤講師としてキリスト教関連科目を担当する機会を頂いてきました。この4月より専任教員として理工学部に着任し、キリスト教学の授業を担当しています。また宗教主事として大学における礼拝や国際交流部Fellowshipの顧問などキリスト教教育活動に従事しています。研究所の所員としては「キリスト教と日本の精神風土」研究グループの代表に加え、「キリスト教と平和」研究グループを新たに立ち上げ、自身の研究関心であるキリスト教平和学の観点から戦争と平和、そして赦しと和解の問題に客員研究員の先生方と共同で取り組んでいます。

戦争や紛争、また様々な暴力が渦巻く世界にあって、キリスト教思想から紡ぎだされる平和思想は今日どのような意義を有しているのか。研究所では現代社会におけるキリスト教平和倫理の諸課題を探究しつつ、キリスト教平和教育についても研究を深めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL : 045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)
FAX : 045-786-7806 (研究所直通・24時間受け付)

発行者：細谷 早里
Director : Sari Hosoya